

生きるための哲学

「できないこと」から「混生」へ

出口康夫（京都大学）

1. ツインバージョニアップ：人文学の産学連携
2. 東アジア的人間観の提案：シンギュラリティ問題と「できないこと」
3. With/Afterコロナ社会の再起動：「混生」社会へ

1 ツインバー ジョン アップ

人文学の産学連携

人文知とは何か？：科学知 vs. 人文知

- 科学知：自然・社会・人間現象の規則性・因果メカニズムの三人称的「記述 (description)」とそれにもとづく現象の予測・制御・人工的生成
 - 現象を「没価値化」した上で、その「現にある(to be)」姿を「記述・予測」
 - 社会課題に対する個々の具体的なソリューション（ベクトル・矢印）の提示
- 人文知：人間的「生」の一人称的（疑似・追）体験的「理解 understanding/verstehen)」とそれにもとづく「生き方・社会の作り方」の提案
 - 「価値」を一人称（単数・複数）的に理解した上で、「あるべき(ought to be)」姿を「提案」
 - 個々のソリューションを可能とする価値の枠組み（座標軸）自体の提案

俯瞰・提案知として人文学

- 人文知：あるべき生・社会・価値の提案を目指す知
- そのためには「俯瞰的視点」と「提案力」が必要
- 俯瞰的視点
 - 価値・生・社会にまつわる多様な事実・知見を共時的に見渡す「総合的な視点」
 - 未来について発言するためには、物事を通時的に捉える「歴史的視点」
- 提案力
 - 現状を批判的に捉え、「課題」を掘り起こすとともに
 - 単なる現状批判に終わらず、説得力・訴求力を備えた分かりやすい課題解決策を積極的に提案する
力量

20世紀人文知の問題点

- 20世紀後半の人文知（特に哲学）
 - 通常科学(normal science)化：英米系分析哲学
 - 大きな前提を不問に付した上でのパズル解きに没頭
 - 過度な伝統主義：大陸系アカデミア哲学
 - 歴史的文献研究への没頭
 - 伝統的哲学の継承に終始
 - 批判への過剰傾斜：フランス・ポストモダン思想
 - 思想・社会の伝統・現状への批判の過剰鋭利化による、積極的提案の地盤の掘り崩し
- 本来持つべき俯瞰的視点・提案力の喪失

産学連携による人文学のバージョンアップ

- 現実の課題を知り、その解決に取り組むことによる俯瞰的視点・提案力の取り戻し
- そのための「社会のステークホルダー」（産業界・行政・市民（団体）等）との知の共創作業
- 個々のステークホルダーの利益を超えて、最終的には「よりよい社会・生・価値」の提案を目指す
- 「科学技術の社会実装者」としての産業界との連携の意義：「よりよい生・社会」に向けた「科学技術の活用法の共同提案」

「日本産業」の課題

1. コンセプト発信力の強化
2. アジアを中心とした更なるグローバル展開の必要性
3. 商品の社会・文化的価値の利潤化

コンセプト発進力の強化

- 新技術・新製品（特にITインフラ）はよりよい生活スタイル、よりよい生き方、よりよい社会の提案
- インフラには「価値観」が組み込まれている
- 日本企業の弱点として、しばしば指摘されてきた技術・製品の「コンセプト」とは、実は「価値観」を含む
- 「価値」に関する知の宝庫（リソース）である人文学を活用することで「新たなコンセプト＝価値観」発信力の強化をはかることが可能

アジアを中心とした 更なるグローバル展開の必要性

- 日本社会の人口減少・アジア（中国・東南アジア・インド）の経済的勃興・グローバルスタンダードヘゲモニー争いの激化
- アジアを中心とした更なるグローバル展開の必要性
- アジアの倫理観・世界観を踏まえた新たなコンセプト＝価値観の提案が必要となる
- 「非西洋圏人文知」として、150年にわたって蓄積されてきた日本文知のアジア研究を活用することで、アジアを含めた非西洋圏への展開を更に推進

商品の社会・文化的価値の利潤化

- 商品・製品の二つの価値：高品質と低価格
- これらのうち特に低価格競争では日本産業は新興国産業に対して不利
- 技術移転が起こった産業分野からの撤退、工場移転による国内雇用・技術エコロジーの空洞化
- 商品の「第三の価値」としての社会（環境）・文化的価値の提案とその利潤化（フェアトレード・ESG投資・etc.）をはかる必要
- ここにも社会・文化的価値の知のリソースである人文知を活用できる可能性がある

人文学の産学連携の意義

- 連携を通じた双方向のツインバージョンアップ
- 人文学のバージョンアップ
 - 産業界とともに社会課題に取り組むことで、その俯瞰・提案力を再鍛錬する
- 産業界のバージョンアップ
 - 人文知を活用することで日本発・アジア発のコンセプト力・文化資本力を強化する

2 東アジア的人間観の提案

シンギュラリティ問題と「できないこと」

シンギュラリティ問題

- AIが人間の知的能力を凌駕する「シンギュラリティ（技術的特異点）」の到来がもたらす諸問題
 - AI・ロボットの社会進出による人間の雇用の喪失
- より深い問題：「人間失業」
 - 人間の代替不可能性＝かけがえのなさ＝尊厳の喪失
- 人間失業をもたらす一要因は西洋由来の機能主義的人間観
- それに対するアジア的オールタナティブの提案

機能主義的人間観

- 西洋哲学の代表的な人間観の一つ：人間＝機能の束（知性・感情・意志 etc.）
 - どの機能を主役（リーダー）と見なすかは哲学者によって異なる
 - 知性：デカルト・カント
 - 感情：ヒューム・ハイデガー（関心・配慮）
 - 意志：ショーペンハウワー・ニーチェ
- 全ての機能を統御する上位統一体は存在しない
- 今日でも脳機能局在説（視覚野・言語野etc.）を根拠に J. フォーダー・D. デネット・P. カールレーサー等が提唱
- 人間の本質・尊厳・かけがえのなさを機能・能力・「できること（capability）」に置く

機能主義的人間観から「人間失業」へ

- 人間的機能は全て有限
- それを超える機能体（生物・無生物・人工物）（＝凌駕機能体）は原理的に常に実現可能
- 実際、凌駕機能体による人間機能の代替が次々と実現されてきた
- 「シンギュラリティ」の到来時、人間の機能的優越性の最後の砦である「知性」に対する凌駕機能体が出現した場合、人間機能・能力が代替し尽くされる、「消尽的代替」が出来
- 人間のかげがえのなさ（代替不可能性）＝尊厳が失われる→「人間失業」へ

かけがえのなさのコペルニクスの転回

「できること」から「できないこと」へ

- 人間（「わたし」）の根源的本質：単独行為不可能性
 - 「わたし」は一人では指一本動かせない
 - 「人々・社会・生態系・ジオシステム」からなる包括的な「生存系(humanospheric system)」としての「われわれ」の助け・支持・アフォードがなければ、自分の身体の実行すらままならない
- 「わたし」は生きて身体行為（ないしはその代替行為）を行う限り、「われわれ」によって支えられている
- 「できないから、「われわれ」によって支えられている（ある）」ことが人間（「わたし」）の本質
- 生きて身体行為を行なっている限り、「わたし」は「できない存在」「支えられている（ある）存在」であり続ける
- 人間の「かけがえのなさ」＝は、本質は「できること(capability)」ではなく「できないこと(incapability)」
「弱いこと」、そして「支えられている（ある）こと」にある

シンギュラリティ問題の解消

- 前提：人間の本質・かけがえのなさ・尊厳＝「できること」
 - 凌駕機能体の出現による「できること」の消尽的代替
 - 「人間失業」としてのシンギュラリティ問題の発生
-
- 別前提：人間の本質・かけがえのなさ・尊厳＝「できること」
 - 凌駕機能体による「できないこと」の代替不可能性
 - シンギュラリティ問題の「解消（dissolution）」

東アジア的人間観の系譜

- 「人間は「できない」「弱い」存在であるからこそ尊い」
- 東アジアの「聖なる愚者」の系譜
 - 「混沌たる愚者」『老子』・「常不軽菩薩」『法華経』・「デグノボー」宮澤賢治
- 「聖なる愚者」の哲学的再現役化による「シンギュラリティ問題」の解消

3 With/After コロナ社会の再起動

「混生」社会へ

三密濃厚接触存在

- 「三密濃厚接触」の回避に伴う欠損感
 - 人間の本性としての「三密濃厚接触性」
 - 人間は「三密濃厚接触存在」
- 三密濃厚接触とは？
 - 「できないこと」の「できる化」に回収されない側面を持つ
 - ← 「根源的なできなさ」は「できる化」できない
 - 「根源的なできなさ」の身体的・集団的受容
 - 肌を寄せ合い、体温を感じ合うことによる「できないこと」の集団的な「抱きしめ」

「混生」社会へ

- 社会・コミュニティの根源的な役割・意義の一つ：
 - 個人の「根源的なできなさ」の身体的集団体験への昇華
 - 「できなさ」の集団的「抱きしめ」
- 「できなさ」の「抱きしめ」を可能にする社会のビジョン：

「混生」社会

「混生」社会とは

- 混生
- 「混（ま）じる生」：単なる他者ではなく「異者」が互いに混じって・交わって営む「生」
- 「混（こ）む」：他者との三密濃厚接触が繰り広げられる「生」
- 「混生」社会：異者同士が三密濃厚接触を行うことで、個人の「根源的できなさ」が身体的に相互受容される社会

With/After コロナ社会の課題

1. 遠隔化の是非
2. グローバリゼーションの再起動

遠隔化の是非

- 社会・生のどの部分を遠隔化すべきか、すべきでないのか
- リオタールの「ポストモダン・ディストピア」
 - 効率化によって一元支配される高度情報化資本主義社会
- 現代社会の課題：脱効率化一元支配
- Post/With コロナの遠隔化
 - 効率化のための遠隔化ではなく、脱効率化のための遠隔化
 - 「混生」の自「遊」時間確保のための遠隔化
- 大学：「反転授業」から「反転キャンパス」へ
 - 大教室講義の遠隔化
 - 教室主体のキャンパスから学寮・食堂・コミュニティスペース主体のキャンパスへ

グローバル化の再起動

- Before コロナのグローバル化 1.0
 - 効率化のためのグローバル化
 - 「効率化の一元支配」の究極形態
 - 効率化の追求による「ヒト・モノ・資本」の高度な流動化とそれに伴う富の極度の偏在
 - 一つの象徴としての「オーバーツーリズム」
- With/After コロナのグローバル化 2.0
 - 混生のためのグローバル化
 - 「遠隔化」によって得られた地理的自由度・自「遊」時間を活用した On- Job 滞在型の異文化・異者の身体体験

ご静聴ありがとうございました。